

小さな子の中にいて 『仲良し』を考える

中澤智子

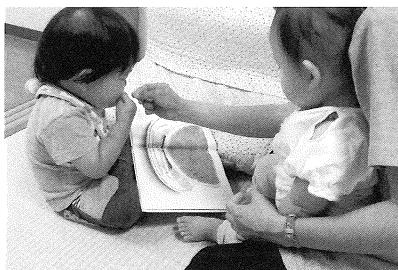
私は0～2歳児の小さな子どもたちが通う大学内乳児保育施設で保育士をしています。小さな子どもたちが共に過ごす日常の中で出会った「子どもの仲良し」について幾つかご紹介させていただこうと思います（文中の子どもは11～14歳です）。

『Yちゃんにもあげて』～一緒に食べよう

H子と保育者が「くだもの」の絵本を見ながら、食べるまねをして遊んでいた時、隣に何気なく居たY男に気付いたH子は保育者に向かって「ンッ」とY男を指さしました。「Yちゃんにもどうぞするのかな」と、Y男に絵本の果物を「どうぞ」と食べさせ

せるまねをすると、H子は満足そうにウンウンとうなづきます。Y男も初めは何のことかわからずキヨトンと見ていましたが、二回ほど交互に繰り返した後、H子のまねをして小さく口を開けて食べるまねをしました。「おいしいおいしい」と保育者が言うとニッコリ笑いながらモグモグと口を動かします。二人は代わる代わる食べさせてもらうのを『次は私の番』と期待に満ちた目で待ちながらその時を楽しみました。

子どもが絵本を読んでと言つてくる時は、保育者との一対一のゆつたりとした時を過ごしたいことが多いのですが、気持ちに余裕があり、そばにいる友達に気持ちが少し向いた時、一緒に食べる楽しさを共有しながら絵本の世界を楽しんだひとときでした。



保育士のひざをめぐって～馬遊びからバス遊びへ

H子をひざの上に乗せてお馬さん遊びをしていた時のことです。それまで一人でチエーンリングでじっくりと遊んでいたT子は、H子が保育者のひざで遊んでいる姿を見てやきもちを焼き、「私の場所よ」とばかりに保育者に抱きつき、H子が座つていたひざを奪おうとします。H子もそれは大変と保育者にしがみつき、お互に一步も譲ろうとはしません。「一人とも一緒に乗れるよ」と言つて乗せても、お互いに相手を押し出そうとすることに一生懸命です。

お馬さん遊びからバス遊びに変更して「バスが走りますよー。ブツブー」と言うと、それを聞きつけたK男がやつて来て、ニコニコ笑顔でT子とH子が奪い合っていたひざにストンと座りました。

T子とH子は何だか腑に落ちないという表情ながらも、笑顔のK男につられるように、流れのまま一緒に座り、ぎゅうぎゅうのバスに揺られているうち

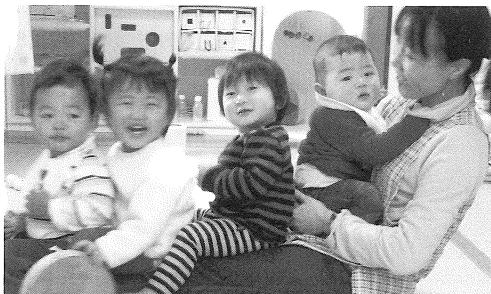
に、何だか楽しくなつてきて、ひざを取り合つていたことも忘れてしました。

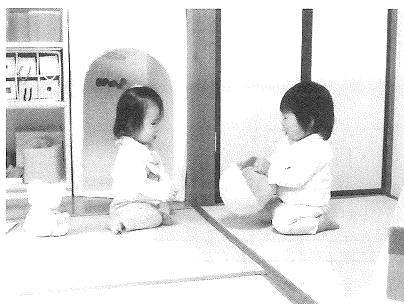
K男が割つて入つてきただことで、保育者のひざの一人分の場所はさらに小さくなつたわけですが、ぎゅうぎゅうにくつついで乗る楽しさに出会つたT子とH子でした。

このような時、保育というものは、本当に子どもたちの手によつてつくられ、また保育者も助けられたり救われたり幸せな気持ちをもらつたりするものだなあと改めて感じます。

『大丈夫だよ。このおもちゃ、どうぞ』

入園したころ、周りのことなんて目にも入らず、体全体で力の限り泣いて、お母さんから離れる悲し





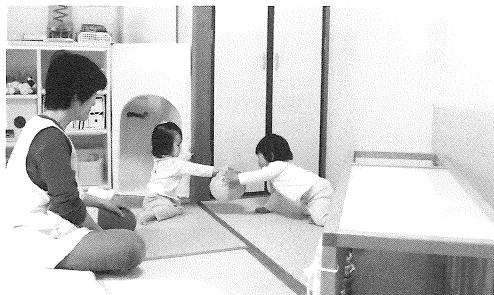
さや不安を訴えていたT子。泣きながら保育士に抱かれている時、おもちゃで遊んでいる子にふつと目を留め、再び泣くの繰り返しでした。園になじんでいくまでの時間は、子どもによつてそれぞれですが、一ヶ月ほどたつたある日の朝、保育者の顔を見て手を広げ、自分から笑顔で来てくれました。もともと手先の器用なT子は、安心できる人と場の中で好きな遊びを見つけていきました。

そんなころ、預かり保育の子どもがやつて来て、激しく泣いていました。

まだ慣れていないころのT子なら、その子の泣きにつられて遊べなくなってしまつていましたが、動じることなく、おもちゃを選んで、『どうぞ』と泣いている子に差し出してくれたのです。『丈夫だよ、このおもちゃ、

かのように見えました。

こんなに小さくても、泣いている子の気持ちに寄り添い、その子のためにはかしようとする自然な優しい姿に、子どものもつ力の大きさ・寛大さを感じずにはいられません。



『どうぞ』に見える行為もその時々で思いは違い、見せてあげるだけのつもりで手放そうとせず、『どうぞ』をしてもらつた子にとつては、『えつ？ くれるんじやなかつたの？』と引っ張り合いになることもしばしばです。

けれどもそんな中で、自分の思いを目いつぱい主張し、受け止めてもうう経験を重ねながら、そばにいる自分ではない相手の気持ちにふれる機会にもなっています。

小さな子どもたちの間で交わされる気持ちのやりとりは、いつも心地よいものばかりではありません。お互いの思いがぶつかり、思いどおりにならなくて泣いたり、怒ったり、保育者に訴えたりといいろいろな方法で自分の思いを通そうとします。一方通行が多くを占めていると言つてもよいかかもしれません。それでも、子どもたちは、隣にいる子の遊びに、またその子自身に興味や関心をもち、自らかかわろうとします。

そしていろいろな偶然が重なり、たまたまそこに居合わせた二人の子どもの間にうれしいひととき、楽しいひとときが生み出され、共有される機会を得ます。

そんな日常の繰り返しの中で、子どもたちは、仲良くしようとか、そんな意識はなく、それでもそばに人がいること、誰かと一緒に何かをすることや、人とかかわることの心地よさやうれしさを感じながら、少しづつ大きくなっていくのではないでしょうか。

小さな子どもたちのそばにいる大人にできることは、『仲良くしてね』という言葉ではなく、子どもたちの思いに丁寧に寄り添い、受け止めていくところから始まるのだと思います。

子どもたちがさまざまな葛藤に出会い、それを乗り越えられるように。そして人と共に、人の中で生きていく楽しさや心地よさを感じられるように。人の信頼感や安心感を抱き、明るい未来を向いて歩いていく様子に、

そんな願いを胸に抱きながら、子どもたちの周りで起ころる出来事や出会うさまざまなものに、一つひとつ真摯に向き合っていきたいと思つています。



(お茶の水女子大学附属いずみナーサリー)